

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意								薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの			
フェノール	フェノール	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であるが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。				頻度不明(過 敏症)		・潰瘍皮膚及び粘 膜(吸収され中 毒症状発現)			・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または易 刺激性の部位に 使用する場合には、 濃度に注意して 正常の部位に使用 するよりも低濃 度とすることが望 ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギ プス包装、パック に使用すると刺 激症状及び吸収 され、中毒症状 があらわれるお それがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。【吸 収され、中毒症 状を起すおそれ がある。】 ・誤飲を避けるた め、保管及び取 扱いには十分注 意すること。	長期間に使用 しないこと。 ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消毒 :フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 ・痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 夜 フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消毒 :フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 ・痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 夜 フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)			
アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル軟 膏「マルイ ン」を使用					過敏症		本剤に対し過敏症 の既往歴			眼には使用しな いこと。		適宜患部に使用する。	下記疾患にお ける鎮痒・鎮痛 外傷、熱傷、 日焼け、皮膚 潰瘍、そう痒 症、痔疾		

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
塩酸プロカイ ン	塩酸プロカイ ン注「ホエイ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚 ・求心神経線 維のNa ⁺ チャ ネルを遮断 し、活動電位 の伝導を抑制 することによ り局所麻酔 作用を発現す る。粘膜への 浸透性が悪い ので表面麻酔 剤としては無 効である。代 謝産物が血管 拡張作用を 有し、速やか に吸収される のでエビネフ リンの添加が 必要である。			振せん、痙攣 ・痙攣(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(痙 攣、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ トヘモグロ ビン血症)	頻度不明(過 敏症)			重篤な出血や ショック状態 (脊髄、硬膜外 麻酔時：症状 が悪化)、注 射部位または その周辺に炎 症(脊髄、硬 膜外麻酔時： 効果が発現し 、敗血症の患 者(脊髄、硬 膜外麻酔時： 敗血症性の髄 膜炎がおこ るおそれ)、メ トヘモグロ ビン血症(脊 髄麻酔を除く) (症状が悪化 するおそれ)、 本剤または 安息香酸エス テル(コカイン を除く)系局 所麻酔薬に 対し過敏症の 既往歴	高齢者、妊婦 または妊娠し ている可能性 のある婦人、 妊娠末期の婦 人							使用に際し、目的温度の 水性注射液として使用する。 脊髄麻酔(腰髄麻酔) 5~10%注射液とし、通常、 成人には塩酸プロカインと して、低位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には 150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量：1回 600mg)1.5~2%注射液と し、通常、成人には塩酸プロ カインとして、200~ 400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通常、 成人には塩酸プロカインと して、10~400mgを使用す る。 浸潤麻酔 (基準最高用量：1回 1,000mg)0.25~0.5%注 射液とし、通常、成人には 塩酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエビネフリン を添加したものを用い、 伝達麻酔、浸潤麻酔に は、通常、成人には塩酸プロ カインとして、10~100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じエビネフリン (通常濃度1:10万~20万) を添加して使用する。	脊髄麻酔(腰 髄麻酔)、硬 膜外麻酔、 伝達麻酔、 浸潤麻酔、 歯科領域 麻酔、浸潤 麻酔
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。					頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)											0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
メントール	内服のみ													大量服用時 には、悪心、嘔 吐、腹痛、下痢、 肝機能障害・外 用にはのみ使用し、 内服しないこと						

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 蓋用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性		適応禁忌		慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)		症状の悪化につながるおそれ		適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
殺菌消毒成分	塩化セテル ピリジニウム	スプロール ローチ	口中で頻りに遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。				0.1%未満(口腔、咽頭の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)								口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			1回1錠を1日3~4回かまらずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽頭炎、扁桃炎、口内炎	
	塩酸クロルヘキシジン	塩酸クロルヘキシジン トローチ・ヒビテン	抗菌剤の中でも広範囲の微生物に作用する部類に属し、特にブドウ球菌などのグラム陽性球菌には、低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。一方、大腸菌などのグラム陰性菌にも比較的低濃度で作用することが知られているが、グラム陽性菌にくらべ感受性に幅がみられる。真菌類の多くにも感受性をしめすが、全般的に細菌類よりも抵抗性がみられる。				0.1~5%未満(舌のしびれ、味覚異常、口内炎、黒舌症、胃部不快感、胃部膨満感、嘔吐、下痢等)	頻度不明(過敏症)			クロルヘキシジンに対して過敏症の既往歴					口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			通常、1回1錠(塩酸クロルヘキシジンとして5mg)を1日3~5回、2時間ごとに投与し、口中で徐々に溶解させる。	口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防	
	ポピドンヨード	イソジンガ ーグル	殺菌菌に対する効果、殺ウイルス(コクサッキーウイルス、エコーウイルス、エンテロウイルス)効果を有する。またヒト免疫不全ウイルス(HIV)に対しては、イソジンガール30倍希釈液で30秒以内に不活化した。その他ポリオウイルスに対しても効果が認められた。				ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	過敏症(0.1%未満)			本剤又はヨウ素剤に対し過敏症の既往歴	甲状腺機能に異常				抜歯後等の口腔創傷時(血餅の形成が阻害されると考えられる時期)にはげしい洗口は避ける。眼に入らないようにする。用時希釈して使用。含そうにのみ使用			用時15~30倍(本剤2~4mLを約60mLの水)に希釈し、1日回数含嗽する。	咽頭炎、扁桃炎、口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防、口腔内の消毒	
	ヨウ化カリウ	内服のみ																			

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果							
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果					
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ						
ヨウ素	プレボタイン ソリューション	・使用濃度 において、芽 生型細菌(グ ラム陽性菌、 グラム陰性 菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有 効である。 ・細菌、真菌 に対する殺菌 効果、結核菌 に対する効果が 認められる。				アナフィラキ シー様症状 (0.1%未 満)	0.1%未満 (そう痒感、灼 熱感、皮膚潰 瘍、皮膚変 色、接触皮膚 炎、血中甲 状腺ホルモン 値(T3、T4 値等)の上昇 あるいは低下 などの甲 状腺機能異常)	(0.1%未満) 過敏症					妊婦中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範囲 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、膈内 投与、妊婦の膈内 長期投与(新生児 に一過性の甲状腺 機能低下)	眼に入らないよう 注意。外用にのみ 使用する	妊婦中及び 授乳中の婦 人への長期 にわたる広 範囲の投与 で先天性甲 状腺機能低 下症の乳児、 溶液の大量 かつ長時間 の接触によ って皮膚変色、 接触皮膚炎	1.本剤を塗布する。 2.本剤を患部に塗布する。	1.手術部位(手術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜の消毒 2.皮膚・粘膜の創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒
アクリノール液	アクリノール液	グラム陽性、陰性菌に有効で、特に連鎖球菌、ウェルシュ菌、ブドウ球菌、淋菌に対し、静菌及び殺菌作用がある。作用機序は、生体でアクリジニウムイオンとなり細胞の呼吸酵素を阻害するといわれている。				頻度不明(塗布部の疼痛、発赤、腫脹等潰瘍、壊死)	頻度不明(過敏症)							大量服用時には、悪心、嘔吐、腹痛、下痢、肝機能障害・外用にのみ使用し、内服しないこと		0.05～0.2w/v%の液として使用する。	化膿局所の消毒、泌尿器・産婦人科術中術後、化膿性疾患(せつ、よう、扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎)	
抗炎症成分	アズレンスルホン酸ナトリウム	含嗽アズレンスルホン酸ナトリウム錠	消炎作用及び創傷治療促進作用、ヒスタミン遊離抑制・白血球遊走阻止作用を有する			0.1%未満(口中のあれ)、頻度不明(口腔・咽頭の刺激感)								拔牙後等の口腔創傷時(血餅の形成が阻害されると考えられる時期)にはげい洗いは避ける。		アズレンスルホン酸ナトリウムとして、1回4～6mg<アズレンスルホン酸ナトリウム錠2～3錠>を、適量(約100mL)の水又は微温湯に溶解し、1日数回含嗽する	咽頭炎、扁桃炎、口内炎、急性歯肉炎、舌炎、口腔創傷	
塩化リゾチーム	レフトーゼ錠	消炎作用・組織修復作用・膿液の分解と排出作用・出血抑制作用				ショック、アナフィラキシー様症状・SJS症候群・Lyell症候群(頻度不明)	0.1～5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)、0.1%未満(口内炎等)、頻度不明肝機能障害(AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTP、LDHの上昇等、めまい)	0.1%未満(過敏症)						本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症)	アトピー性皮膚炎、気管支喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー等のアレルギー性要因、両親、兄弟等がアレルギー症状の既往歴、高齢者	作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでないため、漫然と投与しない。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180～270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支喘息、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合2.歯槽膿漏症(炎症型)腫脹の緩解の場合

口腔咽喉薬(せき, たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
グリチルリチン酸二カリウム	グリチルリチンニカリウムは点眼のみ、ここではトローチが主なのでグリチルリチンモノアンモニウムの注射(グリチロン注一号)の添付文書を使用	抗炎症作用(1)抗アレルギー作用 (2)アラキドン酸代謝系酵素の阻害作用	甘草を含有する製剤、ループ利尿剤、チアジド系およびその類似降圧利尿剤	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)			アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)					長期適用により偽アルドステロン症	グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
グリチルリチン酸	皮膚科軟膏はあるが口内用はなし														
抗炎症成分	トランキサム酸	トランサミンカプセル	・抗プラスミン作用(抗線溶作用) ・止血作用(フィブリン分解を阻害することによって止血) ・抗アレルギー・抗炎症作用	トロンピン(血栓形成傾向)	ヘモコグラゼ(大量併用により血栓形成傾向)、ノトロキシピン(血栓・塞栓症)、凝固因子製剤(口腔等、線溶系活性が強い部位では凝固系がより亢進)		0.1~1%未満(食欲不振、悪心、嘔吐、下痢、胸やけ)、0.1%未満(眠気)	0.1%未満(過敏症)		トロンピンを投与中	血栓、消費性凝固障害、術後の臥床状態および圧迫止血の処置、腎不全、本剤に対し過敏症の既往歴、高齢者			トランキサム酸として、通常成人1日750~2,000mgを2~4回に分けて経口投与する。高齢者で減量。	○全身性線溶亢進が関与する出血傾向(白血球、再生不良性貧血、紫斑病等、および手術中・術後の異常出血) ○局所線溶亢進が関与すると考えられる異常出血(肺出血、鼻出血、性器出血、腎出血、前立腺手術中・術後の異常出血) ○下記疾患における紅斑・腫脹・そう痒等の症状 湿疹およびその類症、蕁麻疹、薬疹・中毒疹 ○下記疾患における咽頭痛・発赤・充血・腫脹等の症状 扁桃炎、咽喉頭炎 ○口内炎における口内痛および口内粘膜アフター
アラントイン	なし														